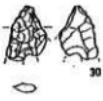
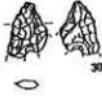


# **奈良市埋蔵文化財調査センター紀要**

**1999**

**奈良市教育委員会**

『奈良市埋蔵文化財センター紀要 1999』正誤表

ページ	行・位置	誤	正
3	第3回ナッシュン	○は破片 (○は破片 5点)	○は碎片 (○は碎片 5点)
6	第4回 30		
14	24行目	当散布地北東約 .8km	当散布地北東約0.8km

# 目 次

## 鹿野園石器散布地について

### —鹿野園石器散布地の範囲とその採集石器—

1 鹿野園石器散布地の範囲.....	1
(1)はじめに.....	1
(2)研究史.....	1
(3)石器採集地点.....	3
2 鹿野園石器散布地の採集石器.....	4
(1)概要.....	4
(2)品種別記載.....	5
石鎚 石鏃木製品 石錐 楔形石器 石匙 削器 石核 剥片 碎片	
(3)石器群の考察.....	13
3 おわりに.....	15

# 鹿野園石器散布地について

—鹿野園石器散布地の範囲とその採集石器—

大庭淳司

## 1 鹿野園石器散布地の範囲

### (1)はじめに

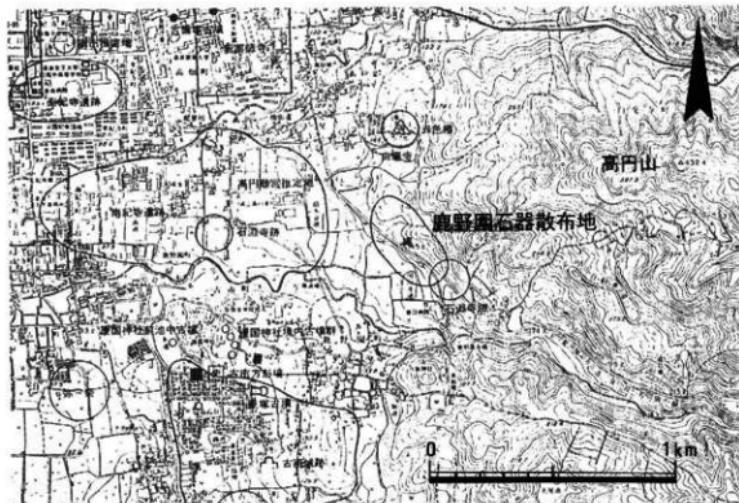
鹿野園石器散布地が位置する奈良市鹿野園町および白毫寺町は、高円山(432m)から鹿野園台地を経て緩やかに奈良盆地へと移っていく段丘上にあり、高原と盆地の中間地帯にあたる。この地は古くから縄文時代の石器が散布することが知られ、現在は高円山西麓を通る主要地方道奈良・名張線の周辺の田畠が散布地として認識されている(第1図)。

筆者は以前、奈良市白毫寺町の高円山西麓で当散布地を発掘調査をする機会を得たが、残念ながら目的とした縄文時代の遺構・遺物はなかった<sup>1)</sup>。これは調査範囲が山の急な斜面地であったせいもあるうが、この近隣でも石器を採集することができなかつた。このため当散布地の基礎資料として報告されている石器を採集された西川廉行氏に確認したところ、現在認識されている散布地の範囲外で多くの石器が採集されていたことが判明した。

本稿ではまず、今までの当散布地に関する研究史をまとめ若干の考察を加えるとともに、西川氏の採集地を明らかにし石器の散布範囲を考えたい。

### (2)研究史

昭和34(1959)年、当時奈良市東市中学校の教員であった西川廉行氏と東市中学校郷土研究部員によって多数の石器が採集され、その成果が西川氏により『東市郷土史抄』にまとめられた<sup>2)</sup>。



第1図 遺跡位置図(1/20,000)

氏はこの採集地を「鹿野園縄文式遺跡」とし、「鹿野園町の東北のはずれで以前鹿野園温泉のあった東北隣の田畠がこの遺跡です。田畠の中の小石を綿密に調べてゆきますと多数のサヌカイトの破片が散らばっていて時折石器が発見されます。東市中学校郷土研究部で調査で発見したものは石匙や縄文式土器時代特有の小形三角形をした無柄石鎌を多数採集しました。この他未完成石鎌をはじめ原石や剥片石屑など製作過程を知る上に好都合な資料を相当集め得ることができました。」と記述している。また上器は小片化し、表面のすりへったものばかりで確認の域に達しないとしている。鹿野園温泉の位置は現在の奈良春日病院の南隣、奈良春日鍼灸施術所別棟の辺りに相当し、遺跡分布図には岩井川と波多野奈良線（=主要地方道奈良・名張線）のほぼ中間に遺跡位置が示されている（第2図左）。

昭和43（1968）年、中村春寿氏は「鹿野園石器散布遺跡」として、石器が「とくに鹿野園温泉の付近および能登川の対岸、すなわち高円山麓部田畠中にもその散布すること著しく、石器完成品に比しては、石クズがとくに多く見受けられる。」と報告している<sup>3)</sup>。これは西川氏が昭和34・35・42（1959・1960・1967）年に採集された資料をもとに書かれたものであるが、分布図第119図には岩井川の南岸（鹿野園温泉の対岸にあたる）の田畠に遺跡位置が示され、その他の範囲が明らかにされていない（第2図右）。「能登川」とあるのは岩井川の誤りであろうか。

石材はほとんどがサヌカイトでまれに石英もあるとし、石器の器種には石鎌が最も多く、いずれも「無柄の三角形」を呈し、他の器種に「三角形皮剝」、「石斧の断片」等があるとする。そして土器片は未発見としている。遺跡の性格は、少なくとも石器を加工したことは認められるし、石器片の多数分布、同形種の石鎌（古式に属するもの）、皮剝の存在から東部大和高原の遺跡との関連について言及している。

昭和48（1973）年には、奈良県教育委員会による遺跡分布調査、および公私の研究者の調査成果をもとに『奈良県遺跡分布図 第一分冊』が発刊され、当散布地の範囲が定まる。しかし、この範囲内に中村春寿氏が分布図で示した地点は含まれていない<sup>4)</sup>。この後、昭和58（1983）年、平成10（1998）年の2度の改訂版が刊行されるも当散布地の範囲に変化はない。平成4（1994）年に奈良市教育委員会が作成した『奈良市文化財分布図（史跡、名勝、天然記念物、周知の埋蔵



第2図 遺跡分布図（左は西川1959より抜粋。右は中村1968の第119・150図を融合し作成。）

文化財包蔵地図 その1)』も同様である。

平成9(1997)年には松田真一氏により『奈良県の縄文時代遺跡研究』がまとめられる。ただし、この中で当散布地の位置は川向井池西隣にドットで示されており、前述のどの範囲とも一致しない。遺跡の説明では、先の中村春寿氏の報告がまとめられ、当散布地に隣接する白毫寺遺跡について触れられている<sup>5)</sup>。

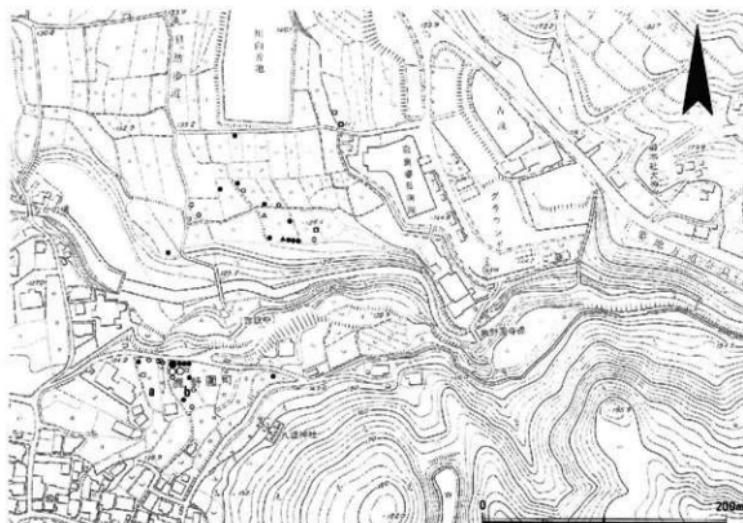
以上のように当散布地の範囲認識には統一がなく、混乱が見られる。その一因は中村春寿氏の報告と分布図との矛盾であろう。

次章からは西川廉行氏、および筆者の石器採集地点について述べるとともに、石器の散布範囲を明らかにしていきたい。

### (3) 石器採集地点

西川氏の教示によれば、大多数の石器は岩井川の南側に示したa・bの田畠で採集したとされる(第3図)。筆者もここで短時間に多数のサスカイト製の碎片や剝片が採集できる事を確認し、さらに周辺の田で緑色チャート製の碎片を一点採集した。これらの地域は高円山麓ではなく、鉢伏峠から続く丘陵の先端に相当し、田畠は丘陵がなだらかになった台地部分に営まれている。鹿野園町は縄文時代にはほぼ現在と同じ地形が形成されていたと考えられることから、近隣に河川があり、舌状に伸びる台地の先端部にあたるこの田畠周辺は縄文時代の人々が活動するのに都合の良い立地であったと思われる。ただし、田畠の耕作で既に地山が露出している箇所があり、場所によっては田畠の造成で遺跡がかなり削平を受けている可能性が高い。

西川氏が『東市郷土抄』で遺跡として報告した「以前鹿野園温泉のあった東北隣の田畠」は



第3図 石器採集地点(1/4,000) 漆▲は石塙、△は二次加工痕有剝片、●は剝片(●は剝片5点)、○は破片(○は破片5点)、○はチャート製剝片、口は土器の採集地点

氏に確認したところ鹿野園温泉の西隣の田畠の田畠の誤りであり、現在の奈良春日鍼灸施術所別棟の西に広がる岩井川北岸の田畠にあたる。この他に氏は川向井池の南隣の田畠でサヌカイト製石器を採集している。またこの周辺の田畠所有者から岩井川の北岸の田畠で過去に多くの石器を採集したと伺った。筆者が踏査したところ、第3図に示すとおり岩井川北岸から川向井池までの田畠で石器が採集できることを確認した。この地は岩井川が作る開析谷の北岸にあたるが高円山の山裾が緩やかに伸び、西に広がる扇状地に比べやや台地状に高まっている。この微高地は傾斜を緩めながら川向井池の周囲まで続き、先の鹿野園温泉東北隣の田畠もこの微高地上にある。これらの岩井川北岸の採集地に一連の遺跡がある可能性が高い。

なお中村春寿氏が『奈良市史 考古編』第119図で示した地点は、氏が西川氏の教示をもとに報告している点からa・bの田畠とみて間違いないと思われる。氏が念頭に置いていた鹿野園石器散布地の範囲は、岩井川両岸の田畠を主として広がる高円山麓部の地域だったのでないか。

また筆者の踏査の結果、第3図に示す地点で土器5点、石器46点が採集できた。土器は小片ばかりで明確な時期が不明だが、土師器2点、須恵器2点、近世の国産陶器1点がある。縄文土器といえるものはない。石器はサヌカイト製のものに石器1点、二次加工痕有剥片1点、剥片21点、碎片21点、チャート製のものに剥片1点がある。なお鹿野園町・白毫寺町の北方には「三笠火山群」と呼ばれる若草山、御蓋山があり、白毫寺町にはこれらを形成する安山岩（紫蘇輝石安山岩）が転石として存在するが、肉眼観察の限りこの安山岩を石材とした石器はない。

石器が最も多く採集できたのはa・bの田畠であり、サヌカイト製の剥片11点、碎片18点が見つかった。対してこの周囲の田畠は休耕されていたりとほとんど遺物が採集できなかった。いずれにせよa・bの田畠がある場所は集中的に石器が製作された場所であった可能性が高い。また西川氏が採集したチャート製の石器はここ北隣の畠で採集したものであり、筆者もここより70m程東の水田で緑色チャート製の剥片を1点採集した。岩井川の北側の地域ではチャート製の石器が見られないことから、岩井川両岸で時期や集団が異なる可能性もある。ただし土器がなく剥片や碎片が多く採集される点で共通しており、共にアトリエの性格を有していたのではないか。

以上のように、研究史当初に認識されていた鹿野園石器散布地の範囲は岩井川両岸の地域であり、現在多くの石器が採集できることが確認できた。このことから奈良春日病院の西隣から川向井池の南方の田畠まで、そして八坂神社前に広がる田畠と、開析谷の両岸に沿った微高地に遺跡が存在する可能性がうかがえる。

## 2 鹿野園石器散布地の採集石器

### (1) 概要

西川氏採集の石器は総点数884点である。器種別内訳はサヌカイト製が、石器31点、石器未製品23点、石錐3点、削器1点、楔形石器3点、石匙1点、石核8点、剥片406点、碎片371点、チャート製が、石核16点、剥片16点、碎片12点、他に瑪瑙の破片が1点ある。肉眼観察の限り三笠安山岩（紫蘇輝石安山岩）製の石器はない。チャートは大半が良質で緑色や青色を呈し、产地は不明。石器の大半は以前鹿野園温泉のあった西隣の田畠とa・bの田畠、川向井池南隣の田畠で採集され、第4図22のサヌカイト製石器は川向井池南隣の田畠、チャート製石器はa・bの田畠とその北隣の畠で採集されている。分布傾向は詳細な採集地点の記録がなく不明。以下器種別の記載を行なうが、石材は特に言及しない限りサヌカイトである。なお、今回筆者が踏査を行ない採集した石器1点（第4図9）もあわせて報告する。

## (2) 器種別記載

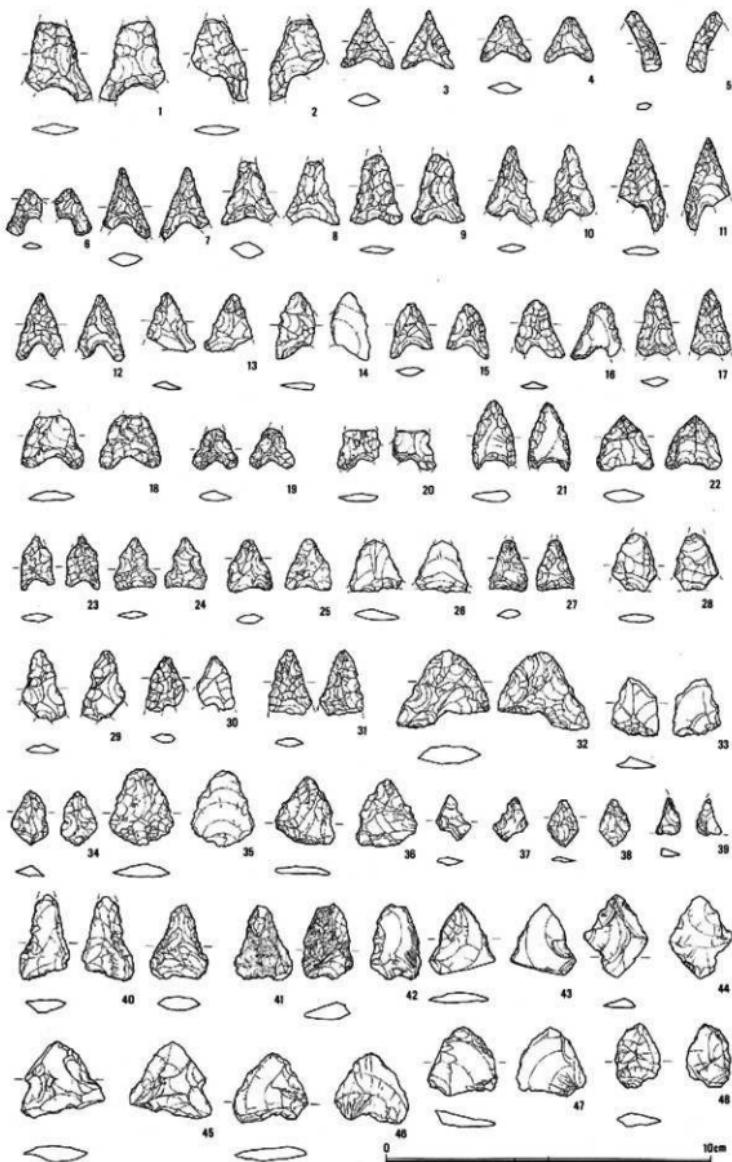
### 石鎚 (第4図1~32)

すべて無基のもので、平面形態はバリエーションに富む。表掲資料であり詳細な型式分類はかえって煩雑に思われた。ここでは菅榮太郎氏が長原遺跡出土の石鎚を基に行なわれた型式分類および型式変遷<sup>6)</sup>を用いて記述を行ないたい。

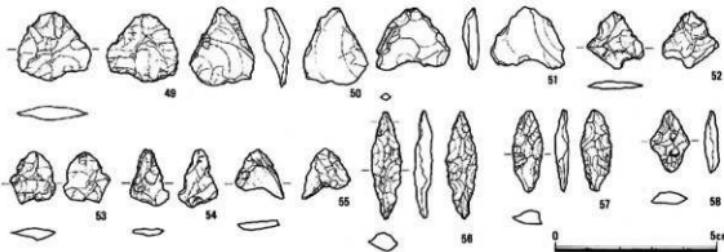
1・2は側縁が緩やかなS字を呈する凹基無基鎚。菅氏分類のD類にあたる。双方とも先端部と脚部が新しい欠損により失われているが、精製品であり長脚鎚と考えられる。1は大型品で両側縁が内に反り、脚部が内湾する。石質は班晶が多く、石理にそって白く縞状に風化している。調整はやや粗い大きな剝離によりなされるが、形態は整っている。表面左側の調整剝離作業は縁辺に対し右から左へ進んでおり、表面右側、裏面右・左側の調整は側縁側からの一連の剝離後、側縁部中央付近に剝離を加えている。2は大型品で脚部がやや内湾し、U字形の深い抉りが入る。側縁の大部分が新しい欠損で失われているが、表裏共に基部の調整後、両側縁側から調整を加えている。いずれも繩文時代早~前期初頭のものと考えられる。

3~6は側縁が直線的に調整され、先端部のなす角度が概ね50°以上になる幅広の凹基無基鎚。平面形態は正三角形や横に拡がる二等辺三角形に近い形となり、脚端部が先鋭な3・4が菅氏分類のA-1類、脚端部が平ら、あるいは丸みをもつ5・6がA-2類にあたる。3は精製ではほぼ正三角形を呈し、浅い抉りが入る。調整は縁辺に対し左から右へ押圧剝離作業を進める傾向があり、これを裏面右側にみてとれる。裏面左側、表面左側は後に補正の調整剝離が数枚入るが、同傾向と考えられる。調整の順序は基本的に裏面基部→表面基部→表面右側→表面左側→裏面右側→裏面左側であり、裏面の両側縁には加工痕が多く残る。4は正三角形に近い形態で、浅い抉利が入る。脚端部はやや丸いが折損によるものである。表面縁辺には加工痕が良く残る。5は左1/2が折損するが、やや側縁が外に張る二等辺三角形を呈すると思われ、U字形の深い抉りをもち、脚端部がやや角張りながら丸みをもつ。6は小型で正三角形に近い形態をもち、側縁がやや外湾する。また基部にU字形の抉りが入る。いずれも繩文時代早~中期前半のものと考えられる。

7~20は側縁が直線的に調整され、先端部がなす角度が概ね45°以下になる細長の凹基無基鎚。平面形態は縦長の二等辺三角形に近い形となり、脚端部が先鋭な7・8・14・15が菅氏分類のB-1類、脚端部が平ら、あるいは丸みをもつ9~12がB-2類にあたる。この他のものは欠損のため型式が判然としないが概ねB類としてよいと考えた。7は二等辺三角形を呈し、V字形の抉りが入る。調整は裏面右側→表面基部→裏面基部→表面右側→表面左側→裏面左側の順で行なわれており、表面右側・裏面左側の一部に縁辺に対し右から左へ押圧剝離作業が進む様子を見て取れる。8は両側縁がやや内に反る二等辺三角形を呈し、浅い抉りが入る。調整はやや粗く深い剝離により形態にしたがって行なわれている。このため調整順序は決められない。9は先端部が欠損するが、両側縁がやや内に張る左右対称の優美な石鎚である。裏面の両側縁側から調整を加えた後、表面の両側縁側から押圧剝離調整を加えている。この後、表面側の基部、裏面側の基部を調整し上げており、菅氏が石鎚の成形技法によって分類したa-4類にあたるかと思われる。10は両脚端部・右側縁が欠損している。調整はやや粗い剝離によってなされるが、表面左側には一連の押圧剝離が見られ、縁辺に対し概ね右から左へ剝離作業をすすめている。11は脚部が欠損しているが、抉りの深く入る秀逸な精製品である。基部から大きな剝離を表裏両面に加え抉りを作り出し、調整は裏面左側→表面右側→裏面右側→表面左側の順に行ない、表面側は先端から基部方向に向かって作業を進めている。12も脚部が欠損するが、精製品である。13は粗雑な調整で



第4図 石器・石器未製品実測図 (2/3)



第5図 石鏃未製品・石錐実測図 (2/3)

あるが整った三角形を呈し、先端部付近にのみ押圧剝離が施される。基部左端部が欠損するため不明であるが、平基無茎鎌の可能性もある。14は右1/3が折損している。裏面には素材剝片の剝離面が残り、幅広の貝殻状剝片を素材にしていると思われる。調整は粗い剝離でなされている。16は、裏面に素材剝片の主要剝離面が残り貝殻状剝片を素材としているとみられる。側縁が先端部近くでやや屈曲し、先端部は丸みを帯びる。このためD類の可能性もある。表面右側縁側の調整は側縁に対し右から左に剝離作業が進んでおり、調整順序は最初基部を行なった後、両側縁を調整し、最後、表面先端部右側を調整する。17は、両側縁が先端部近くで屈曲し、また両脚部が欠損する。このためD類の可能性もあるが屈曲が先端部の再調整の結果の可能性もあり、他にD類とした例と異なるためここではB類とした。表面は両縁辺に対し右から左へ押圧剝離作業がすんでいる。18は上半部が折損しているが、丁寧に調整された精製品である。側縁がやや外に張る三角形を呈する。表面左側は補足の調整が入るが基本的に縁辺に対し右から左へ調整剝離作業が進んでいたと考えられる。調整は基本的に表面基部→表面左側→表面右側→裏面左側→表面基部→表面右側の順で行なわれている。19は先端部が折損し、両側縁も新しい欠損で失われておらず、詳細不明。20は新しい欠損により全体の1/2が失われているが、左脚端部の欠損はさほどではなく、丸みをもった形態と考えられる。調整は粗雑で、押圧剝離は必要な箇所にのみ行なわれている。7・8・14・15が繩文時代早～後期、9・10・12が中期後半～晩期初頭のものと考えられる。

21は側縁が緩やかに外湾するように調整された凹基無茎鎌。抉りが比較的浅く脚端部が短い。菅氏分類のC-2類にあたると考えられる。薄手の幅広剝片を素材としており、両面に素材剝片の剝離面が残る。裏面に主要剝離面がみられ、表面に残るネガティブな剝離面と剝離方向がほぼ一致しており、同打面から連続して幅広の剝片が剝離されていた可能性がある。側縁は外に張り、中央付近でやや屈曲する。素材剝片の比較的薄い部分を基部側とし、調整剝離は石器の縁辺付近にのみ行なわれている。繩文時代中期のものと考えられる。

22～25は側縁の先端部近くに屈曲があり、平面形が全体として五角形を呈する平基無茎鎌。菅氏分類のF類にあたり、基部が若干凹基状になっているものや脚部の形態が若干特殊なものもこれに含まれる。22は、脚端部がやや折損するものの整った五角形を呈し、基部がやや抉りこむ。概ね粗雑な剝離により調整されているが先端部付近には押圧剝離調整がなされ、基部付近は大きな剝離により厚みが減じられている。23は先端部付近が欠損するものの、側縁が屈曲し左右非対称の五角形を呈すると思われる。風化が進み、特に表面側の摩滅が著しい。裏面両側縁には加压痕が多く残る。調整は基部を行なった後、側縁に行なっている。24は両側縁がやや欠損するが、

先端部近くで屈曲し、中央部が緩やかに内に張る五角形を呈すると考えられる。非常に薄手で小型の粗製品。25は粗製で、抉りが浅くやや入る程度である。摩滅が著しく詳細不明。いずれも縄文時代晚期前半ものと考えられる。

26～28は側縁が直線的に調整され、平面形態が二等辺三角形になる平基無茎鐵。昔氏分類のE類にある。26は両面に素材剥片の剝離面が残り、寸づまり剥片を素材としていたと考えられる。素材剥片の剝離面の剝離方向は3枚とも一致せず、定型的な剝片剝離工程は読み取れない。素材剥片の打面側を基部に用い、基部にのみ調整を施す。27は先端部が折損する。粗製で摩滅が著しく詳細不明。28は粗製で、摩滅が激しい。基部両端が欠損するが、抉りがほとんどなく平基と考える。欠損が著しく詳細不明。いずれも縄文時代晚期～弥生時代中期初頭のものと考えられる。

29～31は基部や脚部の欠損が著しく、分類しがたいものである。29は摩滅が著しく、両側縁の大半が欠損し、両脚部も折損している。30は小型の粗製品で、裏面の一部に素材剥片剝離面が残り、縦長の寸づまり剥片を素材としていると考えられる。裏面右側は縁辺に対し、右から左へ押圧剝離作業が進んでいる。31は粗製で、摩滅が激しい。B類かと思われるが基部の欠損が著しく、詳細不明。

なお大型粗製品で異例な32がある。基部の抉りも一枚の粗い剝離によりなされ、左右非対称である。押圧剝離が表面右側にのみ行なわれている。搬入品か、もしくは他のものと時期・集団を違える可能性がある。

#### 石鎚未製品（第4図33～48、第5図49～55）

33は表面の基部に潰れ状剝離があり、右核の素材が両極打法によって分割、あるいは剝離されていた可能性がある。調整は裏面側基部に素材剥片の打面・バルブを除去するための剝離がなされている。34は石鎚先端部の折損品と思われる。35は、裏面に素材剥片の主要剝離面が残り、縦長の寸づまり剥片を素材に用いていると考えられる。表面に残る剝片剝離面から、前段階にかなり幅広の剝片がとられたと考えられる。また先の主要剝離面とは剝離方向が一致しない。表面の左側から基部にかけて押圧剝離による調整がなされており、概ね縁辺に対し右から左へ剝離作業が進んでいる。ただし基部左側は左から右に進んでおり、基部調整の剝離作業が基辺の中央に向かう方向で進んでいることが分かる。36は裏面に素材剥片の主要剝離面が残り、表面には主要剝離面と剝離方向をほぼ同じくするネガティブな剝離面がある。幅広の剝片が同一打面から連続して剝離されていたことが分かる。調整はあまりなされていないが、表面基部側に残る調整剝離は縁辺に対して右から左へ作業が進んでいる。37は裏面に素材剥片の主要剝離面が残り、表面には主要剝離面と剝離方向を異にするネガティブな剝離面がある。左半分を切断し、先端部を作り出している。基部は折損して無い。38は石鎚先端部の折損品である。石質が悪く、調整の切り合いは不明瞭。39は石鎚基部端部の折損品。40は表裏両面にポジティブな面を有し、裏面のそれが素材剥片の主要剝離面である。山形に近い形態の打面を加撃し、横長剥片を剝離している。表面右側に裏面側から調整を加え、表面の剝離面の膨らみを除去している。41は表面に疊面が残る。表面中央にポジティブな面が残り、素材の主要剝離面の可能性がある。表面の側縁に残る調整剝離は縁辺に対し、概ね右から左へ進んでおり、先端部はまた別に調整している。側縁は先端部近くで屈曲し、五角形となる可能性がある。42は稜上を加撃して剝離した幅広剝片を素材としており、打面とバルブを調整により除去している。先端部は折損している。43は幅広の寸づまり剥片を素材としており、表面に素材の主要剝離面、裏面にその前段階の素材剝離面が残り、連続して幅広剝片を剝離している可能性がある。素材の一端を折断し基部とし、先端部は表面右側に裏面

側から押圧剝離を加え調整している。44は幅広の寸づまり剝片を素材とし、裏面にその主要剝離面が残る。表面に残る前段階の素材の剝離面から、素材剝片剝離は一回ごとに打面を移動しているとみられる。先端部表面右側に若干の調整がなされている。45は分厚い大型の剝片を素材としており、左側縁と基部端部を折断により整形する。調整は粗い剝離ばかりで表裏共に周囲から一回ずつ加えられている。46は裏面に素材剝片の主要剝離面が残り、表面にネガティブな剝離面、ポジティブな剝離面が残る。表面の後者の剝離は石核となった素材の剝離面で、裏面の主要剝離面と剝離方向をほぼ同一にする。素材剝片の打面側を基部とし、調整を加えている。47は貝殻状の寸づまり剝片を素材とし、表裏両面に残る素材剝片の剝離面の剝離方向が一致することから同一打面から連続して素材剝片が剝離されていたと考えられる。基部端部、先端部左側縁に押圧調整が加えられている。48は貝殻状剝片を素材とし、表面に残る剝離面から同様の素材剝片が打面を移動させながら剝離されていたことが窺える。左側縁に表面と裏面側からそれぞれ調整剝離がなされている。49は表裏両面に素材剝片のポジティブな剝離面が残り、どちらが主要剝離面が判断がつかない。周囲から大きな剝離によって形を整え、先端部や裏面右側に押圧剝離を施し、調整している。50は左側縁に疊面が残り、この面を打面として幅広の素材剝片が剝離されている。素材剝片の表面に残る二枚の剝離面の内一つは主要剝離面と打面と同じくし剝離方向が一致する。51は寸づまり剝片を素材とし、基部と左側縁に調整を加えている。左側縁は裏面側から一枚大きな剝離を加えたのち、折断により整形、この後先端部に押圧剝離を加え調整している。52は基部左部を折断し、基部を整形している。調整は粗い剝離ばかりだが、表面では左側縁から時計廻りの方向に打点を移動して周囲から剝離作業を進めている。53は裏面に主要剝離面が残り、寸づまりの貝殻状剝片を素材にしていたと考えられる。表面には石核となった素材の剝離面が残り、主要剝離面と剝離方向を同一にする。調整は表面左側と基部に裏面側から、裏面左側と基部に表面側から加えられている。基部の両端部は欠損しているが、側縁が先端部近くで屈曲し、五角形鐵になる可能性がある。54は表面に素材剝片の主要剝離面が残り、裏面には素材剝片の表面に残るネガティブな剝離面が残る。素材剝片の打点側を基部に用い、調整で基部の厚みを減じている。55は小型の寸づまり剝片を素材としており、裏面には主要剝離面と石理に沿った割れ面が残る。

#### 石錐（第5図56～58）

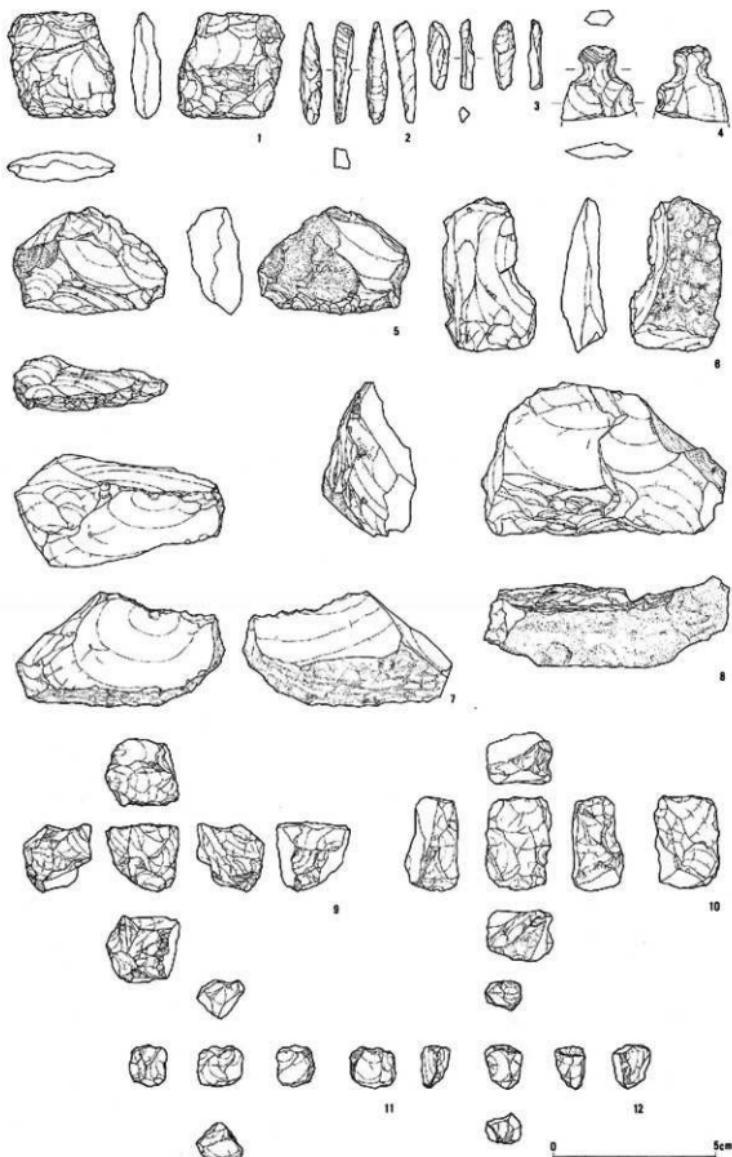
石錐との分離が困難な石器であり円基無茎鐵の可能性もあるが、石錐に比して器厚が厚く、長幅比も狭長であることから石錐としてとらえる。56・57は粗製で中央部に最大幅をもち、逆三角形状の基部を作り出す。56は基部の厚みを減じる剝離があり、57は基部尖端部から棒状剝離を行ない、基部の幅を減じている。58はほぼ菱形を呈するが、基部端部がやや内湾する。小型粗製品で、表面に2箇所、斑晶が外れた痕跡がある。裏面には素材剝片の主要剝離面が残り、分厚い寸づまり剝片を素材に用いていると考えられる。

#### 楔形石器（第6図1～3）

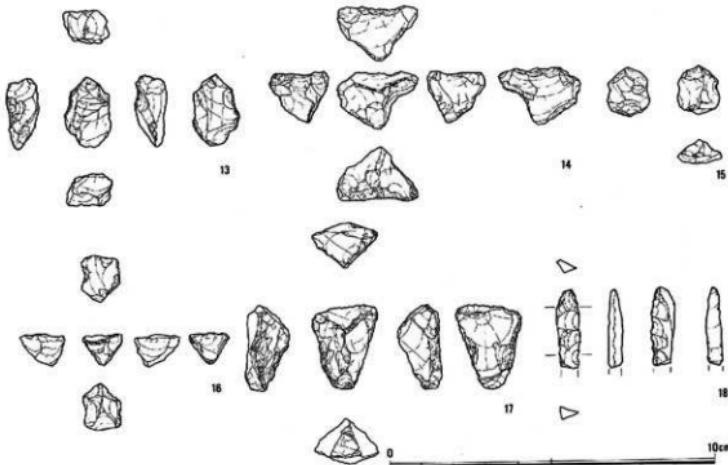
1は、上下、左右四辺に潰れ状剝離、階段状剝離が見られ、特に下辺が顕著である。截断面や折れ面はない。中村氏が「石斧の断片」と報告した石器<sup>7)</sup>はこれにあたると考えられる。2・3は細長の細片状のもので、製作時、あるいは使用時に剝離したもの。2は表面上辺に階段状剝離が見られ、右側面は截断面である。左側面は折れ面に調整がなされている。3は右側面が截断面、左側面が折れ面である。截断面は同時割れによって剝離面が2枚となっている。

#### 石匙（第6図4）

綱型の石匙で、裏面に素材剝片の主要剝離面が残り横長剝片を素材としていると考えられる。



第6図 梗形石器・石匙・削器・石核実測図 (2/3)



第7図 石核・剥片実測図 (2/3)

つまみ上部に潰れ状剥離がみられ、両極打法で調整している可能性がある。

#### 削器（第6図5）

礫面と風化の異なる二種の剥離面で構成され、素材に板状の自然破碎礫を用いていると考えられる。ただし石器製作による剥離面は黒色ではなく風化しておらず、縄文～弥生時代の石器ではなく後世に製作・使用したものであろう。素材の形態を利用し、刃部調整と上辺の整形のみが行なわれている。刃部を下辺に設定し、表面側から調整を加えている。刃部の裏面側に使用痕とみられる微細な剥離痕が多数あり、刃部が表→裏の方向で使用されたと考えられる。なお中村氏が「三角形皮剝」と報告した石器<sup>⑤</sup>はこれにあたると思われる。当散布地の石器を加工したものかもしれないが後世の製作品であり、当散布地の石器組成に含めないほうが良い。

#### 石核（第6図6～12、第7図13～17）

6～8はサヌカイト製の石核である。6は剥片素材の石核で、分割により石核形態を調整し、素材の側縁側から横長の剥片を剥離している。打面を形成した剥離も横長剥片を剥離した可能性があり、剥離角も似ることから打面と作業面を入れ換えて目的剥片を剥離した可能性がある。7は分割礫素材の石核で左側面に石核調整を行ない、上面の剥離面を打面とし、底面に礫面を取り込んだ幅広の剥片を剥離している。8は裏面全てに礫面を残す石核で、上辺と下辺に階段状剥離がみられることから礫面を打面として両極打法による剥片剥離が行なわれたと考えられる。他にサヌカイト製の石核は5点ある。この内2点が板状の分割礫を素材としており、剥離面を打面とし石核の幅一杯に幅広の剥片を剥離している。また剥片素材の石核が4点あり、この内2点は打面と作業面を固定して、幅広の剥片を剥離していると考えられる。他の2点は新しい欠損が著しいが竹広文明氏が中国地方の剥片剥離技術を分類されたものの剥片剥離技術II、石核V<sup>⑨</sup>に相当する可能性があり、石核の周囲から剥片剥離を進めている。

チャート製の石核には最大長2cm以上が6点、2cm未満が10点ある。いずれも不定形で定まった剥片剥離工程はない。9は節理の発達が著しく、ほとんどの縦長・横長剥片が稜上を打撃して

剝離されていると考えられる。下面の稜上から横長剝片を1枚、上面の稜上から縦長剝片を1枚、横長剝片を1枚剥離したのち、上面を作業面として左側面側から2枚の縦長剝片を剥離し、この剝離面を打面として石核正面で剝離を行なっている。ただし打点の位置が節理上であったため剝離に失敗している。10は上下面、主として上面を打面とし、正面・裏面・左側面を作業面として縦長剝片を剥離している。前段階の剝離をみると石核の長軸幅の横長剝片が取られており、石核の側面側からも目的剝片を剝離していた可能性がある。11はサイコロ状をした石核で、打面・作業面を固定せず1回の剝離ごとに変化させている。調整と目的剝離の差ははっきりせず、剝離後の石核の形態にしたがってすばり剝片を剥離していたと考えられる。12は石質の良い緑色のもので、下方にすばまる直方体状を呈する。上面を打面、石核正面に作業面を設定し、細石刃に類する小型の縦長剝片を2枚剥離している。この後、裏面側から両側面を作業面とし、2枚の幅広剝片を剥離している。この石核を細石刃石核と考えるかどうかは問題であるが、他に類する石核がなく、細石刃もみられないことから細石刃を目的とした石核とは考えがたい。あくまで石核調整に関わる剝離であろう。13は裏面に礫表を残し、正面から縦長剝片を剥離している。石質が悪く、節理が発達する。両側面を調整して石核の正面形を縦長にする。上面を山形の打面に調整し、この稜上に加撃して正面から縦長剝片を取ろうとするが失敗し、すばり剝片を剥離したと考えられる。14は上面に打面を固定し、石核調整を介しながら周囲から幅広の剝片を剥離する。15は裏面にポジティブな剝離面があり、正面と裏面に作業面を設定して素材の周囲から幅広剝片を剥離している。16は舟底形の石核で上面に打面を固定し、周囲から幅広の剝片が取られている。17は原礫を分割した石核素材と考えられる。上面には礫表が残り、表面に他の石核素材の分割面と思われる2面があり、裏面にこの素材の分割面がある。左側縁に細かな剝離痕が多数見られるが、稜上に新しい転摩痕が多数あることから、調整とみるより新しい欠損とした方が可能性が高い。

#### 剝片（第7図15）

サヌカイト製406点、チャート製16点がある。

サヌカイト製には縦長剝片が3点みられるのみで大半が不定形な幅広剝片である。背面の剝離面構成をみると同方向から連続して剝片が剥離去れていたと考えられる剝片が32点、異方向の剝離面で構成される剝片が124点あり、石核調整剝片を考えても大半が打面を転移しながら剝片剝離を行なっていたことが分かる。

15は両面加工した石器の縁辺に押圧し、剝離された縦長の剝片である。打面は点状でバルブも発達しない。剝離面はややねじれ、剝片は途中で折損している。両面加工石器の調整は左側面→右側面の順で行なわれ、右側面は基本的に縁辺に対し右から左へ調整作業が進んでいる。左側面は中央に新しい剝離が2枚入っているため調整の手順は不明。両面加工石器の縁辺から種々剝離された剝片だろうか。細石刃石核から剝離されたスボールの可能性もあるが、サヌカイト製の細石刃石核も細石刃もなく、石器群が織文時代のものと考えられることから蓋然性に欠ける。

チャート製には、縦長剝片1点、横長剝片1点、すばり剝片3点がある。横長剝片には、表面に先の横長剝離面があり、打点もほとんど同一である。連続して横長剝片が取られている。打面は点状。すばり剝片や、不定形剝片に関しても打面は点状のものがほとんどである。いずれも1~2cm程度のものばかりで目的剝片として小さすぎる。目的剝片は遺跡外に持ち出されていのだろうか。

#### 碎片

サヌカイト製が371点、チャート製が12点ある。なお、チャート製の大半は打点も剝離方向も

はっきりしないものばかりだが、押圧剝離された所謂「石鎚チップ」の可能性のあるものが1点ある。

### (3) 石器群の考察

石鎚は概して様々な形態をとるが、有茎のものは皆無で、すべてを無茎が占める。調整の度合いもそれぞれの形態によって異なり、時期差があると思われる。素材剥片の剝離技術は石核が無いため詳細は不明だが、ほとんどのものが素材の形態から幅広の貝殻状剥片や縦長の寸づまり剥片を素材剥片に用いていることが分かる。この他に石鎚の素材を得る方法に両極打法や折断の技法があげられるが、客体として折断の例が数例あるだけで両極打法はみられない。一点石核素材を得る際に両極打法が用いられた可能性のあるものもあるだけである。これに対し、押圧剝離による調整には縁辺に対し右から左へ順に作業を進める例が比較的多く見られ、集団あるいは製作者個人になんらかの取り決めがあった可能性がある。ただし、一連の調整後、補足の調整をえた例が多く、縁辺に対し左から右へ作業を進める例や、石鎚の先端部あるいは基部から進める例が、判別できなくなっている可能性もある。また調整の最終工程の分類は菅榮太郎氏が既に行なわれているが<sup>10)</sup>、本石器群ではどの工程も集中する傾向がなかった。表探資料でもあり統計上十分ではなく、先の押圧剝離作業の進む方向性の問題と合わせ、検討の余地を残す。

石鎚の時期は、菅榮太郎氏が長原遺跡出土の石鎚を基に組まれた型式変遷<sup>11)</sup>に照らしあわせば1・2が縄文時代早~前期初頭、3~6が早~中期前半、7・8・14・15が早~後期、9・10・12が中期後半~晚期初頭、21が中期、22~25が晚期前半、26~28が晚期~弥生時代中期初頭とみることができる。ただし菅原東遺跡（奈良市菅原町）から出土した中期と考えられる石器群には所謂五角形鎚や平基鎚が含まれている。大川遺跡（山辺郡山添村中峰山字大川）では早期の大川式に五角形鎚が伴うことが確認されており、また中期末~後期の石器群に正三角形、二等辺三角形に類する平基鎚が存在する。北野ウチカタビロ遺跡（山辺郡山添村北野）には早期の石器群の中に若干の平基鎚が混じり、布留三島遺跡（天理市三島町）には晚期の石器群の中に菅氏分類のB-1・2類に属すると考えられる石鎚がある。これらを例外として考えることもできるが、大和盆地北部あるいは奈良県東部に位置する遺跡では型式編年の若干の変更を要するかと思われる。このため当散布地の時期は縄文時代早期~弥生時代中期初頭にわたる可能性もあり、早~中期・晚期、あるいは早~中期に限られる可能性もある。いずれにせよ明確な時期は不明だが、調整技術にみられる差等から一時期の所産とは考えにくく、ある程度の時期差をもって断続的に遺跡が営まれたと考えたい。

チャート製石核・剥片から見る剥片剝離技術は、概ね打面を上面・下面に作業面を設定し、縦長剥片剝離を指向するものと、打面を固定し、幅広の剥片を剝離するものと、打面・作業面を一回の剝離ごとに移動させ、寸づまり剥片を剝離するものに分けられる。剥片の中には横長剥片もあるが小型のものばかりであり、石核に残る横長剥片の剝離痕も目的剥片を剝離したかどうか判然としない。主体は上にあげた縦長剥片や幅広・寸づまり剥片であったと考えられる。問題は得られた剥片を加工した石器が採集されていないことである。未製品も含め皆遺跡外に搬出されているとは考えにくい。現に押圧剝離された碎片があり、表面に剝離方向の異なる剝離面が交錯したポイント・フレイク状を呈することから石鎚ないしは尖頭器が製作されていたことは想像にかたくない<sup>12)</sup>。緑色で目につきやすいため既に採集し尽くされたのだろうか。

サヌカイト製石器の剥片剝離技術は石核から概ね以下の3類に分類できる。板状の分割線を素材として、剝離面を打面として石核の幅一杯に幅5~7cmの比較的大型幅広の剥片を剝離するも

の。また剝片素材の石核から打面と作業面を固定して、幅3cm程度の幅広の剝片を剥離するもの。剝片素材の石核の周囲から小型の幅広剝片剥離を進めるもの。剝片の背面が異方向の剝離面で構成されるものが大半であることから剝片素材の石核の周囲から剝片剥離する技術が当散布地で多用されていた可能性がある。ただし比較的大型の幅広剝片が剥離された石核がありながら剝片が存在しないため、遺跡外への搬出を念頭に置かねばならない。

なおチャート製石器群がサスカイト製石器群に伴うかは不明だが、採集範囲が重複し、双方に剝片や碎片が多く石器製作に関わる石器群と考えられることから、可能性は高いといえる。

表採資料で組成を考えるのは無理があるが、概して剝片・碎片が多く、石礫がそれに次ぎ、石匙といった生活維持に関わる石器が少なく、磨石、敲石といった調理加工に関わる石器が全くない。土器もない。このことは当採集地が石器製作に関わって利用された場であり、また石礫の形態差からこの地が時期差をもって幾度も利用されたと類推できる。

近隣の縄文時代遺跡との関連を考えるには、石器群の時期が確認され、一定量の組成をもつ遺跡が先述の中期の菅原東遺跡（奈良市菅原町）と晚期の秋篠・山陵遺跡（奈良市山陵町）しかなく、かなり無理がある。石礫の形態から考えると当散布地の凹基無茎礫は菅原東遺跡にB-1類がある点で共通するが、側縁形態や調整の精緻さからやや様相を異にする。五角形礫は両遺跡のものと類似するものがない。平基礫は21が秋篠・山陵遺跡のものと類似するが一点のみであり、確証に欠ける。これらの変差から当散布地と両遺跡は時期差や集団差をもつ可能性があるが、表採資料であり資料数が少ないと現段階では想像の域を出ない。やや距離を隔てるが、布留遺跡堂垣内地区（天理市布留町）の中期から後期と考えられる石器群と比較すると当散布地のサスカイト石器群と似かよった石礫が見受けられる。五角形礫などは第4図22に類する形態のものが存在するし、A・E類にも類するものがある。これらのことから集団間に何らかの関連がある可能性もあるが包含層の出土資料であり、時期に関しては明言を避けたい。

なお地勢から周辺の縄文時代遺跡との関連を考え、今後の予察としたい。

当散布地北東約0.8kmには早期の楕円押型文土器、後期あるいは晚期の粗製の縄文土器や、石匙を出土した白毫寺遺跡（奈良市白毫寺町）<sup>13)</sup>があり、高円山西麓から西方にのびる尾根上に位置し、北の能登川、南の岩井川の形成する複雑な扇状地の中間にあたる。立地条件の類似やその近接性から当散布地との関連が考えられる。

やや大和盆地内に入ると、北東約1.3kmの位置に南紀寺遺跡（南紀寺町）があり、縄文時代草創期の有舌尖頭器1点が古墳時代の遺構から出土している<sup>14)</sup>。北東約1.6kmの位置には東紀寺遺跡（奈良市東紀寺町）があり、奈良女子大付属中学校屋内運動場新営工事に伴う発掘調査の際、表土から縄文時代中期後半の土器細片が1点出土している<sup>15)</sup>。両遺跡の調査地は春日野台地南辺を西流する能登川の扇状地にある。

北東3.0～4.0kmの位置にあたる大和盆地底部には、縄文時代後期から晚期の遺跡が多く見つかっている。晚期のものと考えられる御物石器が出土した大森遺跡（奈良市大森町）<sup>16)</sup>、後期終末（宮滝式）のドングリピット、堅穴住居を検出した平城京左京三条五坊三坪下層遺跡（奈良市大宮町）<sup>17)</sup>、後期前半の土器・石匙が出土した平城京左京三条三・四坊下層遺跡（奈良市大宮町）<sup>18)</sup>、晚期中葉（滋賀里3式）の土坑、自然流路を検出した平城京左京四条三坊下層遺跡（奈良市三条町）<sup>19)</sup>がある。かつて大和盆地一帯は縄文時代後期以降に活動の場として定着するとの指摘があったが、近年の発掘調査によって盆地底部から早期・前期の遺跡が見つかっており<sup>20)</sup>、盆地縁辺部に位置する遺跡とも関連をもった生活圏をもっていたと考えられる。当散布地の石器群が早期

から始まる可能性があるため注意したい。なお平城京左京五条五坊九坪の調査（奈良市大森町）では後世の溝から草創期の有舌尖頭器1点が出土しており<sup>21)</sup>、盆地内の草創期の遺跡の存在が予想される。

また縄文時代には鹿谷園町および白毫寺町の地形はほぼ現在と同じ様相であったと考えられるが、鹿谷園石器散布地と同様、春日山断層崖から盆地部に流れだす河川により開拓された段丘上あるいは断層崖下の扇状地に立地する遺跡として、6～7km南方にある布留川流域の遺跡群<sup>22)</sup>があげられる。また大和高原には当散布地から約12km離れたところに、布目川中流域の遺跡群<sup>23)</sup>、白砂川流域の遺跡群<sup>24)</sup>がある。当散布地の集団との関連を考える上で視野に入れておきたい。

### 3 おわりに

以上、本稿では西川氏が採集された石器資料を基に石器散布地の範囲確認、石器の資料紹介を行なった。また筆者の踏査の結果、現在散布地外とされていた地から石器が多数採集できることを確認し、研究史当初に認識されていた石器散布範囲が岩井川周辺であることを確認した。研究史上の混乱を解決する一助となれば幸いである。今後、奈良県教育委員会が当散布地の範囲を定めた経緯を明らかにし、岩井川两岸の石器散布範囲との関係を明確にする必要がある。また今回踏査を行なわなかった岩井川が形成した扇状地についても白毫寺遺跡との関連から縄文時代の遺跡が存在する可能性があり、当散布地との関連から更に踏査を進みたい。

石器群については採集資料でもあり、十分とはいえないが石鐵の分析を行なう中で押圧剝離作業にみる傾向を示し、また石器群の時期が縄文時代早期～弥生時代中期初頭、あるいは縄文時代早～中期・晚期、また縄文時代早～中期にあたる可能性を示唆した。剝片剝離技術においては資料数が少ないものの、サヌカイト・チャートそれぞれがある一定の剝片剝離技術を有し、双方共に打面と作業面を転移しながら不定形な剝片を剝離するものが多数を占める。その中でサヌカイト製石器群では剝片素材の石核を用い幅広剝片を、チャート製石器群では分割研磨素材の石核を用い縦長剝片を剝離する指向性がみとめられた。ただしチャート製の石器が見つかっていないため、サヌカイト製石器群とは時期が異なる可能性が残される。今回は周辺地域の石器群との対比しか行なわなかったが、今後畿内の縄文時代のチャート製石器群の剝片剝離技術との対比を行ない、石器群の時期を考える必要がある。またサヌカイト製石器群についても同様であり、剝片剝離技術や石器の調整技術から他地域との関連を考える課題が残された。

なお今回の資料紹介にあたり、西川廉行氏には石器資料を貸与いただきと共に採集地に関する貴重な御教示を賜った。また松浦五輪美氏、久保邦江氏には石器に関する御教示・御指導を頂いた。文末ながら記して深謝の意を表したい。

### 註

- 1) 摂篠1997「鹿野園石器散布地の調査 第1次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成8年度』奈良市教育委員会
- 2) 西川廉行1959「鹿野園縄文式遺跡」『東市郷土史抄』pp.2-3
- 3) 中村春寿1968「(217)鹿野園石器散布地遺跡 鹿野園町」『奈良市史 考古編』奈良市教育委員会 pp.179,198-199
- 4) 奈良県教育委員会1973『奈良県遺跡地図 第一分冊』pp.13
- 5) 松田真一1997『奈良県の縄文時代遺跡研究』(編)奈良県立橿原考古学研究所、由良大和古代文化研究協会 pp.32,60-61,89

- 6) 菅榮太郎1995「石器資料の型式及び製作技法の編年的検討」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告書』 財団法人大阪市文化財協会
- 7) 前掲中村春寿1968
- 8) 前掲中村春寿1968
- 9) 竹広文明1988「中國縄文時代の剥片石器 その組成・剥片剥離技術」『考古学研究』35-1
- 10) 前掲菅榮太郎1995
- 11) 前掲菅榮太郎1995
- 12) 田中英司氏は縄文時代の石器の製作を考える中で、正面に異方向の剥離痕の交錯する細石刃状の碎片を特に「石器チップ」と呼称し、碎片から石器製作の存在を伺い知る傍証としている。
- 田中英司1979「縄文時代の剥片石器製作」『風早遺跡』庄和町風早遺跡調査会
- 13) 中井一夫1983「白毫寺遺跡」『奈良県遺跡調査概要1982年度』奈良県教育委員会
- 14) 森下浩行1995「南紀寺遺跡の調査 第4次」『奈良市埋蔵文化財発掘調査概要報告書 平成6年度』奈良市教育委員会
- 松浦五輪美1996「奈良市内出土の旧石器について」『旧石器考古学』52 旧石器談話会
- 15) 小池伸彦1994「東紀寺遺跡」奈良国立文化財研究所
- 16) 岡本東三1972「奈良市発見の御物石器について」『考古学雑誌』8-2
- 17) 宮原者一1996「平城京1995年度調査概報」『奈良県遺跡調査概要1995年度』奈良県教育委員会
- 18) 亀井伸雄・安田龍太郎1980「平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報」奈良国立文化財研究所  
東潮1989「平城京左京三条三坊十一坪調査概報」『奈良県遺跡調査概要1988年度』奈良県教育委員会
- 19) 相原嘉之1995「平城京左京四条三坊十一坪発掘調査報告書」平城京左京四条三坊十一坪発掘調査会
- 20) 編文時代前期と考えられるものに桜井市箸中遺跡、香芝市狐井遺跡、早期と考えられるものに天理市布留遺跡打越地区、香芝市下田東遺跡等がある。また生駒郡三郷町の勢野バラニ遺跡をはじめ盆地内の各地から有舌尖頭器が出土しており、草創期の遺跡の在り方を明らかにできる可能性が高くなってきている。
- 21) 立石堅志1995「平城京左京五条五坊九坪の調査 第302次」『奈良市埋蔵文化財発掘調査概要報告書 平成6年度』奈良市教育委員会  
出土した有舌尖頭器については前掲の松浦五輪美1996で報告されている。
- 22) 北から船福ヶ谷遺跡、平尾山遺跡（萬葉時代早期～前期）、布留遺跡豊田地区（早期・後期・晚期）、布留遺跡打越地区（早期）、布留遺跡堂垣内地区（中期～後期前半）、布留遺跡西小路地区（中期初頭）、布留遺跡赤坂地区（早期）等があげられる。
- 23) 邑地遺跡（中期終末・後期）、桐山和田遺跡（草創期・早期）、北野ウチカタビロ遺跡（草創期・早期・中期終末・後期初頭）、中萩遺跡、下深川遺跡（後期）、クズレ谷遺跡（早期）などがある。
- 24) 阪原角田遺跡（中期末・後期）、阪原阪戸遺跡（中期終末）、阪原門前遺跡、大柳生中殿遺跡（前期終末・中期初頭）、大柳生ツクダ遺跡（後期・晚期）等がある。



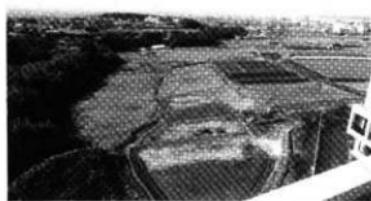
鹿野園石器散布地遠景（北西から）



岩井川周辺石器採集地遠景（西から）



岩井川北側石器採集地遠景（西から）



岩井川北側石器採集地近景（東から）



岩井川北側石器採集地近景（北西から）



石器採集地田畠 a・b 近景（北から）



石器採集地田畠 a・b 近景（北西から）

奈良市埋蔵文化財調査センター紀要

1999

平成12年3月18日 印刷

平成12年3月24日 発行

発行 奈良市教育委員会

奈良市二条大路南1丁目1番1号

印刷 (株) 吉田企画

奈良市秋篠町1005番地-1